



菊池川流域 日本遺産



JAPAN HERITAGE

日本遺産

菊池川の 中世河口港関連遺跡群

ひごし いかんかくこうぼ りんさんごほが
肥後四位官郭公墓・林均吾墓
しんそうしやこうぼ キリシタンぼら
振倉謝公墳・吉利支丹墓碑など

ミネラルウォーターランド
Mineral Water Land



菊池川流域



肥後四位官郭公墓



林均吾墓



吉利支丹墓碑



振倉謝公墳

■ 菊池氏と地域の発展を支えた中世河口港、伊倉

菊池川下流の左岸に位置する伊倉は、菊池川河口の港として栄えた町です。古くから有明海を介して、海外との窓口になっていました。菊池川流域の豊かな森林資源や刀剣などは、高瀬や伊倉の港を拠点としてから海外へ輸出され、有力武士団であった菊池氏の繁栄をもたらしました。菊池川からは大陸から輸入された陶磁器が見つかっています。また、海外からは大陸の高僧やキリスト教の宣教師なども訪れています。江戸時代の大陸から渡ってきた明人の墓などがあり、海外とも活発な交流が行われていた地域でした。

加藤清正の肥後入国後、菊池川の流路変更や石塘築堤によって船が入らなくなり、港としての機能はなくなりましたが、菊池川下流の左岸域の中心として、江戸時代以降も栄えました。

玉名市内には、江戸時代初め頃の外国人墓が複数あります。江戸時代、鎖国が行われ、外国との交流が長崎のみに限定される以前は、玉名地方にも多くの外国人が訪れ、海外との活発な交流を示す資料として大変貴重です。

■伊倉の歴史

伊倉北八幡宮と伊倉南八幡宮は、道路を隔てて隣接し、奈良時代に勧請されたと伝えられます。近代の旧社格では郷社に列せられ、古くから伊倉地域の住民の崇敬を集めてきました。

建久年間（1190～1198）に豊前国（現在の大分県）の宇佐八幡宮がその所領と由来について書き上げた『八幡宇佐宮御神領大鏡』によれば、伊倉は古代玉名郡の郡司であった日置氏が開発した所領であり、これを承保元（1074）年に筑前講師永源に売却し、さらに康和5（1103）年に永源から宇佐大宮司公順の手に渡って宇佐八幡宮領になったとされています。それ以降、宇佐氏に代々相伝され、半不輪領の荘園「伊倉別符」として成立したと考えられます。天文2（1533）年の宇佐宮番長（財務担当者）永弘通忠による報告「宇佐宮領注文」には「玉名郡宇佐宮領伊倉保百五十町」とあります。

南北八幡宮はもともと一つであり、伊倉北側の大地の字古伊倉屋敷にあったとされ、『伊倉町史』によると南北朝時代に伊倉北八幡宮を古宮より現在に移す、とされています。正平6（1351）に懐良親王によって勧請された説もあります。

鎌倉時代後半ごろ、伊倉別符について所領を巡る訴訟の記録が残されており、現在伊倉北方と伊倉南方と分かれている状況から、下地中分されたと推定されています。

伊倉は菊池氏の影響のもと、港として古くから発展し、旧流路を見下ろす台地にはかつて貿易船を係留したと伝えられる「唐人船繋ぎのいちょう」が残され、往時が偲べれます。



伊倉北八幡宮



伊倉南八幡宮

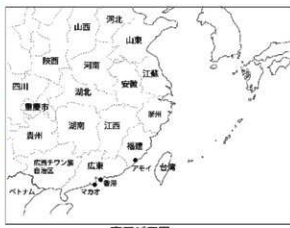
○大航海時代の世界

15、16世紀は、スペインやポルトガルなどのヨーロッパ諸国が、アジア・アメリカなどヘクリスト教を広めながら植民地を求めて進出する大航海時代が到来していました。世界各地で宣教師が活動し、日本にもフランシスコ・ザビエルがキリスト教を伝えました。

東アジアでは、明朝の後半期であり、ポルトガルがマカオに居留地を確保して日本や東南アジアへ進出の拠点としていました。アジア各国の商人が積極的に交易を行っており、日本では大陸や朝鮮半島、東南アジアとの朱印船貿易が行われていました。



大航海時代の世界



東アジア図



左図 中古附上古玉名郡繁昌図
大正時代に作成された、『玉名郡史』の付図。
熊本を代表する郷土史家の中川高（太平洋
戦争中のペリリュー島守備隊長中川州男陸
軍大佐の兄）によって作成されました。菊
池氏が最も繁栄していた吉野朝時代（南北
朝時代）の菊池川河口の様子を推定して描
かれています。高瀬と伊倉の津（港）を利用
して韓文（朝鮮半島と大陸）との交易に
よって繁栄したことが表現されています。



上写真 伊倉十三川 桜井川

伊倉の台地周辺には、湧水点が多くあり
ます。その中の13か所を伊倉十三川と呼び、
昔から人々の生活用水に利用されてきた
。その水は非常に良質で、かつて海外ま
で行くような長期間の航海で利用しても腐
れることがなかったと伝えられています。



八代郡内の惣庄屋を歴任し、干拓事業などを手がけた藤子木量
平は、天保年間（1830～1844）に清正公の事業を記した『藤公
遺業記』を著した。上図はその底本となったといわれる『勝国治
水道』の付図（写）。江戸時代の干拓事業が本格化する以前の様子
が描かれています。

伊倉から高瀬にのぼる流路は、すでに中世末には大型船が航行
できなくなっていた。石橋築堤により、伊倉は完全に港としての
機能を失った代わりに、旧流路周辺は小田牟田とよばれる広大な
耕作地となりました。



石橋樋門群の中の新内井樋
樋門本体に「明治二十三年十月竣工」と刻まれています。



菊池川下流域全体図

菊池川下流では、右岸に高瀬、左岸に伊倉が所在し、船着場が整備されて地域の拠点として発展しました。江戸時代以前の菊池川は、高瀬から東に流れ、伊倉方面を経て有明海に注いでいました。中世は、菊池川の河口から伊倉を経由して高瀬まで船が行き来しており、川を利用した水運が盛んでした。河口港となっていた高瀬、伊倉では、これを加藤清正が流れを現在の流路に変更し、伊倉の南一帯を耕作地とする事業を行いました。このことで、江戸時代以降は大浜経由の高瀬ルートが主要ルートになりました。



横島山から見た小田牟田



久島山から見た石塘

肥後四位官郭公墓

地元に「四位官(しいかん)さんの墓」と呼ばれている墓があり、墓碑銘には「皇明 考濱沂郭公墓 元和巳未年(1619)年仲秋吉旦 海澄県三都男国珍榮立」とあります。慶長、元和年間の史料に登場する、朱印状を持って東南アジア各地で貿易に従事していた肥後四官の墓とされています。

海澄県は、現在の廈門(アモイ)の西側に隣接する福建省竜海市付近とみられます。

1949年に龍溪県と海澄県が合併して竜海県となり、1993年に竜海市となりました。



墓全体



墓碑銘

振倉謝公墳

伊倉北方の「本堂山(ほんどうやま)」とよばれる小高い丘には、伊倉八幡宮の神宮寺であったと伝えられる報恩寺跡があり、歴代住職の墓や、宇佐一族の石塔群、補陀落渡海碑などが残されています。

昭和51(1976)年、本堂山の墓地公園整備に伴う発掘調査で、漆喰製の廓内に納められた木棺が出土しました。付近には「大明振倉謝公墳」と刻まれた墓誌があり、調査後に墓碑とセットで石張りの墳墓が復元されています。振倉謝公とは、肥後四官と同様、貿易に従事していた明人とみられます。



墓全体



昭和51年の調査時状況



墓碑銘

明人林均吾墓

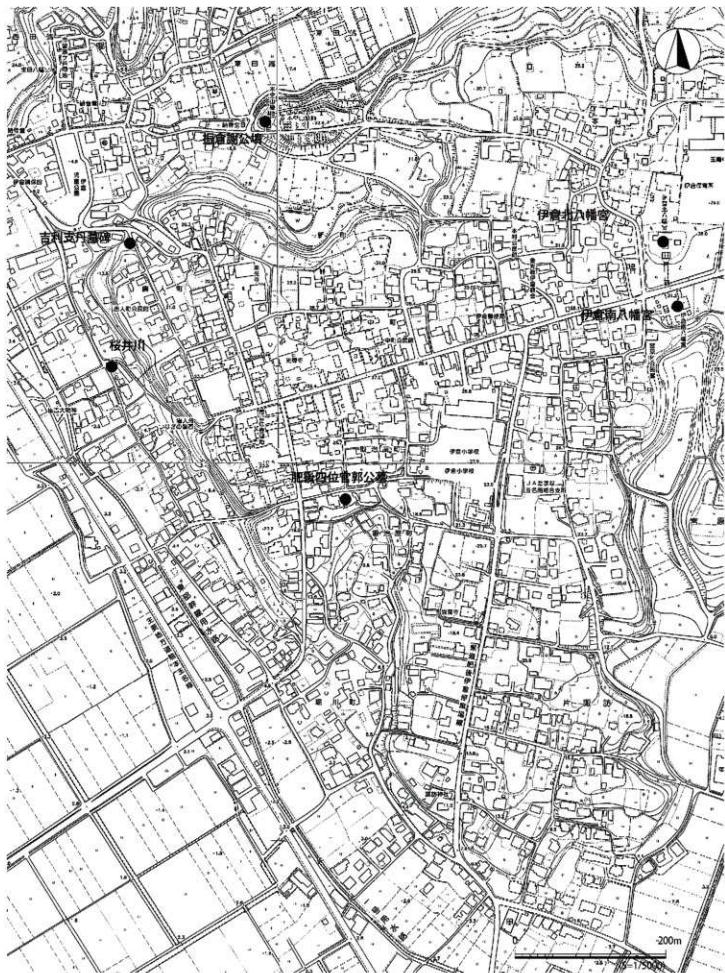
玉名市天水町立花(たちばな)には、墓碑に「龍郡 元和七年(1621)林均吾墓 男新作立」と刻まれた墓があります。龍郡は現在の中国福建省内と推定され、元和七年に息子である新作が建てたことが刻まれています。史料によると、慶長年間に5回朱印状を得た人物に林三官(はやしさんかん)がおり、林均吾はその一族と考えられます。



墓全体



墓碑銘



伊賀全体図

吉利支丹墓碑

前面に十字を刻んだ蒲鉾型（かまぼこがた）の墓碑で、明治時代に土中から掘り起こされました。墓碑が出土した墓地进行管理する一族には、「バテレンの頭髪」とされる毛髪が伝えられており、伊倉に在住した宣教師と墓といわれています。



墓地全体



墓碑

外国人墓の種類と意義

○華南様式の唐人墓

五輪塔などの日本の伝統的な墓制に対して、外来の墓制は唐人墓などと呼ばれてきました。墓の形態は、立碑形式の石製墓碑を墳丘前に立て、その前を石垣などで囲った前庭部を設けるタイプなどです。これは大陸の華南地域を中心に分布する墓制で、沖縄、台湾の墓にも共通性があります。日本では、明朝末に日本に渡来した明人の墓に用いられ、かつて海外貿易の拠点となった地域に分布する傾向があります。鎖国以降は長崎に多く分布します。江戸時代始め頃、明が滅亡する前後の動乱から逃れた人々が日本に住み付き、その人たちの故郷の様式を伝える墓として築かれたと考えられます。浄応3年（1654）、中国臨済宗の僧である隠元隆琦が日本にやってきて、明時代の禅宗の特色を伝える黄檗宗を開きました。江戸幕府の保護を受け、日本仏教の一宗派となりながらも、代々の住職の墓は華南様式の伝統を継承しています。

○キリシタン墓

16世紀、日本にキリスト教が伝来して以降、大名層などでも信者が増えていました。しかし次第に規制されるようになり、信者は少なくなりながらも、キリスト教様式の墓は日本各地に残っています。十字を刻んだ蒲鉾型の墓碑や、半円柱状碑などに石組遺構を組み合わせるタイプなどがあります。



長崎市の稲左悟真寺の国際墓地内にある墓。福建省出身の明人墓が多くあります。



長崎市指定史跡「五官の墓」
長崎市深堀の菩提寺にある、福建省出身の呉五官の墓。
慶長、元和年間に朱印船貿易を行いました。



菊池川流域全体図

交通機関で



Access

車で



菊池川流域日本遺産公式サイト

日本遺産のストーリーに登場する文化財や、玉名市、山鹿市、菊池市、和木町などの観光情報を紹介しています。探索モデルコースやフォトギャラリーなど、菊池川流域ならではの魅力を発信！

<https://www.kikuchigawa.jp/>

